

先日、語ルシストの会のメンバーの懇親会があり、多くの方たちと居酒屋に集まるということをして3年ぶりに行いました。

コロナ禍の3年間は対人との接触を避けるということで孤立する中、そのような状況でも色々と精神障がい者の支援に関してかぶらてを訪ねて来られる方達がいたことで、去年の10月からコロナの感染状況が沈静化してきたのでインフォーマルな任意で集まる会として「語ルシストの会」と命名して月1回の例会を始め、今年の9月で1年を迎えることになりました。

カタルシスとは「心の中に溜まっていた澱(おり)のような感情が解放され、気持ち浄化されること」を意味していて、心の中の澱(ストレスなど)を浄化する場として「語ルシストの会」があります。

そのような中、残暑も厳しい時期に夏バテを吹き飛ばす懇親会をしようということで、親睦を兼ねて交流を深めながら、より地域での連携の必要性を話題にして和気あいあい忌憚のない意見をお互い話し合うことができる懇親会になりました。

立山氏も記載している通り「精神障がい支援での多職種連携＝大事な事は皆さん重々理解されています！しかし、実際はスローガン(口で言うだけ)を掲げるだけで、実際に継続した行動を起こしている方に立山未だかつて出会っていません。

地域に出て感じた事は、既存の精神障がい支援(地域)はフォーマル支援が異常な程、縦割りです。」

というように、多職種連携とスローガンがあっても現実には医療と福祉が別々に支援しているので包括的にその人に必要とされる支援が成り立たない現状であるし、既存の支援や前例に則した支援をやっているのが精神障がい者支援の医療・福祉の現実であり、他の障害者の世界では「自分たちのことは自分たちで決める」という自己決定権やストレングス(自分の強み)などを生かした支援を行うことが主流になっているなかで、真摯に現状の支援でよいのかと疑問を持つ支援者に巡り合い、宮崎にも新たな支援を模索する方達が存在するという事で、地域での支援の在り方として、地域密着小規模他職種連携によって全人的に支えることを実践する支援を目指すことをコンセプトにした「語ルシストの会」を立ち上げることになりました。

精神科病院や大施設での管理的な支援に憤りを感じて小規模であれ自分たちの目指す一方的でなく伴走する支援を実践するために立ち上げた人たちが、同じ小規模同士が連携して、大手やフランチャイズの事業所に対峙するためには支援の差別化が必要で、既存や前例を打ち捨てて新たな伴走する支援を作り出すためには実践してフィードバックできる場や真剣に話し合う場があることが求められていると思えます。

ビジネスでも福祉でもアートでも、誰もがやっていることや既成のことをやっているには衰退するのは必然で、いつもイノベーションや自己改革をやり続ける意思を持って推進することによって支持されるのであって、永遠に螺旋状の円を描いていくことを同じ仲間や同志の方達と研鑽していくことが継続できる最大の方法だと思えるので、「語ルシストの会」のコンセプトである人と人とが親しく交流をしながら真摯に忌憚のない話し合いができる場がある事が大事であると思えます。

これから、この会自体が地域の中で支持される会になり社会貢献できる資源として提供できるように、各々の専門職のスキルアップなどの研修会や「8050問題」という地域の課題などに積極的に研修会を企画できたらと考えています。

また、多職種と同じように同業種の連携も小規模の事業者が生き残るうえで必然と考えますので、積極的に色々な課題を話し合っって協働した取り組みが大事と思います。

今回このように振り返ることができたのも「語ルシストの会」を継続的に開催してこれたからこそで、立ち上げに貢献して頂いた立山裕也氏（ココロとカラダのリハビリステーションほのか代表）や「語ルシストの会」のネーミングを考案して頂いた前畑和樹氏（みつばち診療所勤務）など40代前後の専門職の方たちが参加し、刺激し合う仲間たちに出会えたからこそと感謝しています。

[#語ルシストの会](#) [#みつばち診療所](#) [#訪問看護ステーションすずり](#)
[#訪問看護ステーション夢紡ぎ](#) [#ココロとカラダのリハビリステーションほのか](#) [#訪問看護ステーションつむぎ](#) [#居宅介護支援事業所心の音](#)
[#居宅介護支援事業所ほのか](#) [#宮崎市中央東豊北地区地域包括支援センター](#)
[#井上病院](#) [#地域活動支援センターかひえらて](#)